

まえがき

本書は、「照山もみじ」の名義で同人誌『G.W.G (Amicus)』に掲載した中島梓及び「やおい／ボーイズ・ラブ (BL)」に関する論考に、大幅な修正と加筆を行いまとめたものである。巻末の初出一覧に示した通り、もともと一本であった論考を分割して各一章としたり、論考の一部の節を他の論考に統合したりしている。また、章としての体裁を整えるため、節中の内容を一部削除している。

本書の目的は、「六八年」の歴史と「やおい／BL」の歴史を接続することにある。「六八年」と「やおい／BL」は、それぞれ個別に語られる場合が大半である。しかし、「やおい／BL」の出発点となった「美少年マンガ」や「少年愛」小説を生み出した作者たちの中には、各々の仕方「六八年」を通過し、その経験や記憶を踏まえ、自身の創作活動を展開していった者もいた。「六八年」(あるいは「全共闘晩期」)は、必ずしも彼らに肯定的な印象ばかりをもたらしたわけではない。それでも、彼らは、「六八年」の「革命」から受けたインパクトを、マンガや小説といった表現方法を通じて「物語化」しようとして努力した。その努力から、「やおい／BL」は生み出されてきたのである。

現在の出版市場に溢れている多種多様な「BL」から、こうした「革命」の記憶を見出すのは、きわめて難しい。なぜ、「革命」は忘却されたのか。本書はこの疑問にも、力の及ぶ限り誠実に取り組みたい。九〇年代半ば以降における「BL」市場の成立とそのバブル的な活況は、まさに

出版資本による「六八年の課題の反革命的实现」⁽¹¹⁾というべき事態であった。「革命」は、資本主義によって「実現」された。「やおい／BL」は、今やひとつの文化となった。だが、「私たちはこれでいいのだろうか?」。本書のテーマは、常にこの問いと共にある。

注

- (一) 中島梓「《ロマン革命》序説」(『文学の輪郭』／一九八五〔昭和六〇〕年一〇月／講談社〔講談社文庫〕)。
- (二) 桂秀実『増補 革命的な、あまりに革命的な「1968年の革命」史論』(二〇一八〔平成三〇〕年五月／筑摩書房〔ちくま文庫〕)。